

雜 感 五 題

廣 兼 圓 澄

一〇八

一 信 仰

『温かき胸の血潮にふれもせてさびしからず
や教とく君』

柳原樺子女史の作だと言ふ此歌は常に私に反省と鞭撻とを與へる。私は餘りに屢々淨土宗が至極最勝の教なることを説き聽かされた。けれども未だ一度も深い感動を以て聞いた事はない、これは自からの恥かしい心狀を、吐露する所以であるが、併し一面に所謂愛宗護法の方法が餘りに『淨土宗の僧侶なるが故に』に捕はれて、常に義務の形に於て、無反省に淨土宗の最深最尊を説かれる事のみ多いやうに感じるからであることを否むわけにはゆかない、樺子女史の此歌は恸うした時に思出すに相應しく寂しい氣持に導くのである、吾々は如何にも熱烈なる信仰

を有する如く又信仰を有する者のみ人生を有爲義化し、人格を向上せしめ、確固たる安心立命の尊き境地として『信ある者こそ眞に富めるなり』てふ言葉を繰返すことを好む。併し何時もそれが單に自からが僧侶の位置にあるが爲の義務であつたり、一の職業の形をとつたり、教者たることに誇りやかな興奮を催されたりして、眞に裡に燃ゆる何物でもなかつた度に、言ひ知れぬ寂しからずや教とく君の歎きは深まるのである。

本年の春、高等講習會で『日蓮宗義の概要』を日蓮宗の學匠某師より聽いた時師の熱烈流暢な日蓮教義の長廣告は全聽衆を魅し去る大いなる力の感じられた事は誠に頼母しいものであつた師の淨土教に對する攻撃も、たとへその説明中

に決して正しい批判ではないと認むべきものが多々あつたにも拘らず、師の熱烈なる信仰の力は是認せざるを得ないものと信せしむるに充分であつた。日蓮宗に慙うした熱烈なる信仰を有する人のあることが羨ましい氣もした程であつた。私は今更に日蓮の教化力の偉大さを絶叫したのである、然るに師は講演の最後に及んで、指方立相の淨土教の問題に對する質問に對して講演中は随分と指方立相を攻撃しておき乍ら、『私が若し淨土宗の僧侶であるならば、今は日蓮宗の立場にあるから攻撃するけれども、立派に指方立相で淨土教を活かして見せる云々』と述べられた事を記憶する、何たる御都合主義の言葉であらう、何たる無信の證明であらうと私には響いた、私は此最後の誇りやかな師の言葉を聞かされた時、甚だしい侮辱の感に打たれた結局師も『寂しからずや教説く君』に過ぎずして日蓮主義の宣傳屋であり、日蓮宗侶なるが故に、日蓮教義を高潮する學匠に過ぎなかつた事に失望して終つたのである。然し私は今、師を

殊更らに攻撃せんとするものでない。自からに反省するとき、決して非難し得る程の何物でもない事を悲しむばかりである。然し乍ら過去に於ても又現在にあつても、その多くが無自覺に稀に『祖師の昔に歸れ』と言つたやうな、内容味の乏しい體裁のいゝ愛宗護法を徒らに叫びながら、既成教團の形式にのみ執しつゝ、その搾り汁に汲々たるのみにして、眞に宗教そのものに對する考察も自覺もなく、又祖師法然上人が絶叫せられし時機相應に對する、歴史的並に、その精神と現代社會との關係を深く念慮に存して居ないかに見る宗教家そのものゝ生活を考へるとき寂莫の感は免がれ得ない。而も常に祖師を云爲し、唯祖師の偉大さを口癖のやうに讚美する——之は誠に無難な保護色である。けれども、その多くは祖師の精神の誤解であつたりその一面觀であつたり、没史的考察であつたり二祖三祖等已が教團系列の上に現はれたる教義の上塗りや祖師稱揚の繰言に過ぎないのである法然上人の精神を云爲する者の多くの中に、教

團の一員なるが故に、鎮西や記主や問師等末師に忠實なる僕に過ぎない場合が無かつたと誰か云ひ得やう。諸宗皆然りの觀がある。

教典結集に當つて、過激異端邪説の徒として排斥せられた大衆部こそ大乘佛敎の淵源であり、母體でありしことに吾等は深き興味をそゝられる、顧ふに一宗の祖師と仰がれる人々は皆、或意味に於て、その當時に於ける既成敎團に對する叛逆者ではなかつたか、彼の鎌倉諸宗勃興に於ける、法然、親鸞、日蓮等皆然りであつた、叛逆者なるが故に尊いと云ふのではない、好奇心の代表者として偉いと稱讚するものでもない、彼等が眞理に對する眞摯なる探求者であり、勇猛にも自己に對する自覺に燃ゆると共に、時代と機根とに對する眞の救濟者であり先達なりにしに存し、而も一度獲得體驗せる所信に對しては一步も譲らざる闘士であつた、吾等が渴仰する點は實に此處に存する、彼等が遺し置きし遺文法語の類が尊いのではない。彼等の不撓の精神と眞理に對する熱烈なる求道とその發露こそ、

いみじくも仰がれるのである。

言ふ迄もなく鎌倉新宗敎の掲げし標幟は等しく『時機相應』の四字であつた。實に時機相應は大いなる宗敎の覺めであり生ける宗敎の誕生を意味するものであつた、之れ鎌倉佛敎の特色たると共に之が魁をなせる我宗の特色であつて偉大なる祖師の達見である、かくして淨土の敎團は建立せられ、時機相應の風に和して、正法の宣傳は、一世を風靡するに至つたのであつた。けれども斯の如き眞摯なる生ける宗敎の醒めも祖師を遠ざかるに従つて、その精神は固定化し生氣なき敎團の道具化されて、法城を護る保守主義者無自覺者等に依つて叫ばれる覺宗護法の色あせた幟は『祖師の昔に歸へれ』の復興主義的弱音を生氣なく擧げる、併し『祖師の昔に歸れ』と云ふことが悪いのではなく尠くとも宗敎としては其處に重大なる意義を有する、けれども吾等が復歸せんとする祖師の精神は、其當時に於ける祖師の面目に明なる如く、時機相應の大旆であらねばならぬ、末法の世も生滅流轉の

實相に變りはない、人類の文化は間斷なく改廢を續けて居る、既に七百年以前の時機相應の法の上にのみは、變化なき事を是認すべきであらうか、尠くともかく考へる事は許容し難い。吾等は祖師の精神に迄復歸することを希念する。けれども現代人をして薄暗き行燈文化に迄も復歸せしめんとするの愚を劃てるものであつてはならぬ、吾等は常に祖師の昔を憶念し復歸すると共に而も其當時に於ける時機相應に史的考察を加へつ、現代の吾等の上に、眞の意義を有する時機相應の法を建立することが、眞に宗教をして生命あらしむると共に、亦正法の宣傳を可能ならしむるものであり、之やがて正しき意味に於ける愛宗護法であり、祖師への復歸を物語るものであり、吾等の責務であらう。

ヴォルテールが『女を見て薔薇にたとへたのは詩人である、併し二度目に女を見て薔薇のやうだと叫んだのは馬鹿である』と云つた言葉を思ひ出だす。之は極端な例ではあるが、甲が美しいと云つたからとて、乙も亦美しいと叫ばねば

ならぬと云ふ道理は眞理の世界にはない。それは單なる追隨であり阿諛であつたりするに過ぎないのである。甲も乙も同じ實感をなしたと云ふ事が愚かなのではない。甲の實感を以て一つの教判をつくる事の愚劣さを嘲笑したのである。

吾等は祖師法然上人を稱讚する事に於て、やぶさかなるものではない。けれども吾等の第一義諦は上人が辿りしと同じやうに、自からの眞理追求（求道）と眞の意味に於ける時機相應の正法宣傳の旅にのぼることにあらねばならぬ。七百年以前の社會は今日の社會ではない。されば吾等は教團を考へる前に、宗教そのものを考へ宗教そのものを考へる時自己そのもの、自己を圍繞する社會そのものを凝視しなければならぬと思ふ。自己を内省し凝視せざるものに、どうして眞理の道が求め得られやう。自己の中に社會は常に反映して居る。自己を知ること、やがて現社會に對する理解を深める所以であり、自己を救濟し得る者こそ眞に社會の救濟者である。

自己の救濟なきものに社會救濟の資格はない。要は各自の宗教を建立することを理想とせねばならぬ。いづれにしても心にもない、お座なりの空つぼな自他を欺く事の甚だしい眞似事はやめねばならぬ。

2 エリ・エリ・ラマサバクタニ

『三時ころ大聲に、エリ・エリ・ラマサバクタニと呼りぬ、之を譯せば吾神、吾神なんぞ我をすて給ふ乎』といへるなりとは十字架上に於けるキリストの最後の叫びであると馬太傳第廿七章四六に記して居る。馬太傳を繙くものは此文に至つて、誰しも一種の疑惑を懷かないものはないであらう、同四七には『傍に立たる者のうち或人これを聞て彼はエリヤを呼る也といふ』と記してあるが既にその當時にあつても疑問を挟んだであらう、そうして、決して一致しない二の全く異つた解答が永久の對立を宣する事となつた。悪魔は擧つて、之未だ徹底せるものなき哀れなる信仰の破綻者キリストの神をも怨みし苦悶の象徴であり悲鳴であると譏り、從順なる

神の待者等は異口同音に之れ讚神歌の前節なりとの解答に加擔する、果して、苦悶呪咀の怨聲であつたか、讚神法悦の雄叫であつたのか、同五〇には『イエスまた大聲に呼りて息絶へたり』と記するのみで、その大聲の内容を示して居ないから結局いづれとも決し難い、吾等も唯異つた二つの解答の遺産を受繼ぐばかりだ。

3 灸痕

私の住むが京部の東南端に位し農工區域に屬して筋肉勞働に従事する人々で多數を占められて居ることは一番強く湯舟につかつて居る時に感じる。黒く逞しい筋肉の緊張と背中にはあらはれたる灸痕に遺憾なく表現されて居る。直径一寸許りの灸痕——これは老人に親しみの多いものであることは、もとよりであるが、壯年の人々にも決して珍らしくない現象である。如何に勞働が彼等の肉體に對して冷酷であるかを忍ぶ。灸そのものの効驗如何は無經驗の自分には解らないし又問ふ所ではない。勞働が彼等を酷使することの深刻さを觀察するばかりである。然し

この一寸直径の灸跡はその殆んどが御大師様の御符灸とか稱する類のものであるらしい、人々は唯その事實にのみ満足することなく、何か神秘な存在をかつて來なければ納得しない特性を習慣づけられて居る。灸そのもの、科學的な功能や施灸者の技術はむしろ第二義におかれて摩訶不思議の妙用を頂かなければ承知しないものとみゆる特別に大きな灸痕を有し、其上にはつた膏藥の下には膿が白く流れて居るにも拘らず彼は云ふ、決して痛くはない、湯に入つても痛痒を感じない、御大師御符灸の有難い所以であると宣傳して居る——どこまで信用したらいいものか、灸痕と勞働と迷信とが皮肉に彼等の背中に表現されて居る。

4 謗 誹

メシナの太守リオマの娘ヒーロオとフロレンスの貴族クラウディオとは大守の宮殿で熱い／＼想思の仲となつた、そうしてすべては、うまく取り運ばれてクラウディオは女婿として選ばれた、結婚式の日取も定められた。處が陰氣な不

平屋のドンジョンの邪間が入つて、彼は明日が結婚と云ふ前夜或男に命じて、ヒーロオの召使マーガレットにヒーロオが寝てしまつた時分その寢室の窓から彼女の服装をして顔を出して此男と話をするやうに約束させた。その光景をクラウディオに見せて戀する彼女が他の男と通じて居ると云ふ事を信せしめやうといふ計畫であつた。この悪計は目的を果した。ヒーロオは全く浮氣な女だと思ひ込んだクラウディオは結婚の式場で彼女の祕密をあばき散々に恥をかゝせた。無邪氣な彼女に對する愛はすつかり憎みに變つて終つたのである。興奮した口調で淫らな無實の罪を述べたてられた、この不運な婦人は『本當に、お、神様』と悲痛の極みに達して氣絶して終つた。人々死んだものだと思ひ込んだまゝ、教會を去つた、併し、人間の性質を良く見極める賢い老牧師は注意深く令嬢が呪の言葉を聞いて居た時の顔色を見守つて、處女としての神聖を物語る清い焰が燃えて居るのを見破つたこの期する所のある老牧師はヒーロオの死を披

露さし、父に獎めて喪服を着させ娘の爲に紀念碑を建て埋葬の儀式を執行はしめた（實際は間もなく蘇生してゐたのであるが）恚うした誤多々々の裡に、ドン・ジョンの悪計はばれて、彼は逃亡した、彼女を包んだ疑ははれた、クラウダイオは自分の殘酷な罵言で憤死した戀人の幻影で胸を痛め、リオナトに侮辱の許を求め、如何なる極刑にも甘じることを約した。リオナド

が下した刑罰は娘が死んだ爲に、自分の嗣となつた、彼女の従妹と明日結婚せよと云ふのであつた、その夜クラウダイオは悲しみに満ち、亡き戀人の墓場で悔恨の涙に泣き明かした、明る朝結婚の男女は引合はされた。花嫁は假面をかぶつて居た。花婿は改めて夫たらんことを請ふた。見知らぬ花嫁は『私が生きて居りました時分にはあなたの先妻でありました』と云ひ乍ら覆面を執つた。ヒーロオ自身であつた。クラウダイオの喜は大低想像が出来る。夢かどばかり己が眼を疑つた。そうして叫んだ、『ヒーロオさんですか ヒーロオさんは死んだ筈ぢやあ

りませんか』とリオナトは之に答へて『誹謗が生きておる間娘は死んでおりました』と言つた私はこの最後のリオナトの言葉に深い興味を覺へたと云ふので、沙翁劇作中の（「から騒ぎ」）結婚にからまる一悲喜劇の概要を述べて終つた。併し私はこの最後の言葉から種々の聯想に導かれる。

誹謗と稱揚、眞と偽、正と邪、善と惡、尊敬と侮辱——此等は皆同様の立場にある仇同士である、決して兩立し得るものではない、兩者は常に鬪を續けて居るのである、そうして互に同じ領域を相争つてやまない、これは永恆に運命づけられた人間界の歴史である、吾等の先人が『無理が通れば道理引つ込む』と歎いたのも此等對立せる兩者の關係を明かにして居る、誹謗が生きておる間、眞實の彼女が死んで居た事に何の不思議もない、神話に於ける善惡兩神の鬪争はその終焉を人類と共にするであらう、而も此兩者は敵の存在によつて自からの地位の認められる事を知つて居る、之は人類が求め喰ひし

智慧の實に既に含有されて居たのである。誹謗

や偽や邪や悪は何時にも注意深く眞や善の假面を

覆つて現はれる、これは素顔を現はさない方が

結局都合だと考へたに依る、だからいざとな

れば、其假面を取去るのに躊躇するものではな

い。そうでなくとも時々こつそりと假面を脱し

て本性の焰を吐く彼等の間では此假面を眞實、

正善等と呼んで素面を方便と呼ぶ。人類は神と

悪魔との異なつた稱號を以て屢々對立せしめ、

神は讚美すべきもの、悪魔は呪ふべく恐るべき

もの憎むべきものだと一應は定めて終つて居る

けれども、その一方をのみとる事を潔しとはし

ない、彼等はその孰れもが都合なものであり

時に不都合なものであると考へて居る、だから

一應は神と悪魔との對立を許し乍ら、いつかは

兩者を神の領域に入れて、善神、悪神の二者に

侍へんとし、そのいづれもへ媚を送ることを忘

れない。かうして對立せる兩者は永久に人類に

依つて鬪を強られてゐるのである、此状態を『誹謗が生きておる間娘は死んでおりました』

と第三者は答へる。

5 觀音の誓告と玉女

程遠からの過去に法然や親鸞が半宗教的な文藝

的色彩を以て再び姿を現はし、種々の意味に於

て、各自の法然觀親鸞觀の上に、彼等は新しき

現代の羅衣を着て現はれた、今も尙その姿を消

したわけではなく、現代人の前へは法然や親鸞

が次から次へと變裝もて現はれつゝあるであら

う、而して彼等が現代人に興味を呼び起し共鳴

を與へるものは、彼等が民衆的、人間的、凡人

的の姿に於て現代人に話かけ、肩を並べて歩む

ものであるとする點であらう。就中親鸞に追隨

する若人は彼が妻帯し肉食し普通人であつたと

云ふ感じに依つて、彼を記憶し彼を慕ふであら

う。斯くして親鸞は現代人の中へ蘇へつたので

ある。私は恚うした傾向をよし文藝的流行であ

らうとも慶ばしい事だと思ふ。石丸梧平氏の著

『受難の親鸞』の中に親鸞が六角堂參籠に絆ま

る情景を感激もて叙述せることも（同書百四頁—百六頁）上述の如き傾向よりして當然と云ふ

べきであらう、だが私には單なる共鳴をのみは與へなかつた。石丸梧平氏の『受難の親鸞』に於ける六角堂參籠の記事を見るに、範宴(親鸞)が參籠百日の満願となれるの早朝、觀音の御前で念佛三昧に入つて居ると、夢とも現とも、わかちのない中に觀音菩薩が現はれて『——善信』

『——善信』と呼びかけ『行者宿報にて、たとひ女を犯すとも、我れ玉女の身となつて犯されん、一生の間よく莊嚴し、生命終つては引導して極樂に生せしめん』……『心を疑つた——

——佛の世界に女犯の天地があらうとは思はれなかつたからである『ましてや觀音菩薩が範宴の妻とならうと云はれる!!』……すると暫らく經つて菩薩は更にお言葉をかけられた——最初の御言葉のごきまでも慈悲に満ちたおやさしかつたに反して、これはやゝきつとしたお聲で『この文我が誓願である、一切の群生に説き聞かせ!!』その聲に自から驚いて夢心地の範宴がはつきりと、もとの意識にかへつたのである等と夢想と觀音の誓告の光景を記述し著者の感

鳴が強く織り出されてあつた、もとより之は文藝的作品であつて、石丸梧平氏の親鸞觀を現代的表現もて如實にあらはしたものであるから、私は之に就いて、立場を異にした兎角の批評を試みやうとするものではない、然し讀者の私には頗る不滿の想を懐かしめたのである。私の聯想は後の平安の末期、高倉天皇の承安三年より九十年、龜山天皇の弘長三年十一月に至る、世は平清盛の專横より北條六代の執權長時の時代にわたる史的親鸞の上に移る、けれども確實なる史料に乏しい彼の生涯は漠然たるを免れない六角堂の參籠は建仁元年親鸞二十九歳の時でその目的は偏に出離の知識を求めんの要望と、當時山門からは異端邪説として排斥せられて居る吉水に赴く事に對する去就を決せんが爲であり觀音の示現は、彼をして意を決して吉水に走らしめ新しき生涯への一步を歩み出だすことゝなつたのであらう事を惠信尼の消息等に依つて想像する事は頗る穩當であるが、覺如の著『本願寺聖人親鸞傳繪』上には

建仁元年辛酉四月五日夜寅時聖人夢想の告ま
し／＼き、かの記にいはいはく、六角堂の救世菩
薩顔容端嚴の聖僧の形を示現して、白衲の袈
裟を著服せしめ、廣大の白蓮華に端座して、
善信に告命してのたまはく

行者宿報設女犯 我成玉女身被犯

一生之間能莊嚴 臨終引導生極樂文

救世菩薩、善信にのたまはく、此は是我誓願
也、善信この誓願の旨趣を宣説して一切群生
にきかしむべし云云

とあつて『受難の親鸞』に出づる所は全く此文
に依つたものであらう、之に依つて傳説には建
仁三年の冬歲三十一、偶々關白兼重、法然上人
に凡夫往生の範を示さんが爲に上人門下の上足
に妻すに吾女を以てせんことを請はれ、遂に親
鸞は兼重の女婿として選ばれ、玉姫と婚すとす
るのであるが、もとより之は史實として信憑す
るに足るものでなく、彼の『本願寺聖人親鸞傳
繪』なるものも、所謂傳記の編成でなく祖徳の
宣揚の目的によつて編せられたもので從來唯一

重要な資料となれるにも不拘、史實として依
據する事を得るに乏しいものであつて、殊に、
我成玉女身被犯等の誓告の如きは一層此感が深
い。のみならず親鸞の撰述、消息やその言行に
も又歎異鈔や執持鈔等にも、六角參籠に關する
ものは見當らないやうであるし、惠信尼の消息
には、百日參籠の事は出て居るけれども、玉女
（玉姫）に關して知る由もない。唯吾々は僅か
に惠信尼以外に幾人かの夫人の在りし事を想像
すに過ぎない（もとより門外漢の私は親鸞の事
蹟に就いて多くを語り得るものではないが）然
し私は、かゝる史實を云爲するのが目的ではな
い。吾等は跪き稽首し合掌する佛、菩薩に對す
る親鸞の態度を考察して見度いのである。淨土
教が大慈悲、絶對愛の權化として、佛、菩薩に
對する事は言ふ迄もなく之を高潮する所に淨土
教の特色は存する。三十三躰に應現して一切衆
生を濟度し給ふ觀音の化益は隨時隨處に吾等を
鞭撻し、その靈徳を以て莊嚴じ、引導して長劫
に變りなき化用に對する感謝の念は深く親鸞の

腦裡に刻まれて居たであらう。然し抑制し能はぬ本能を佛誠に對する理性の鬭争に傷ましき苦悶に泣きし親鸞が遂に凡夫往生の絶對他力の本願に歸するの一大光明を見出したりとはいへ、自からの本能の肯定を又其配偶迄を菩薩の誓告に得たりとする確信に何の價値が有り得よう。

よし親鸞がかゝる誓告を夢想したりとするも吾等にとつては用もなく一顧の意義をも存しはしない、人間的事である事に於て彼を讃仰する者は往々恚うした點を偉なりとして高潮し感激もて昇がうと劃てるであらう、けれども、それは單に人間的事であつたと云ふ親鸞の反面を知つて宗教家としての親鸞を知らざるものであり、尠くとも佛教の精神の何處にあるかを辨へざる淺慮に依るものと言はねばならぬ。絶對の大慈を垂れ給ふ如來は極惡の凡夫をむしろ正機として他力の本願は設けられた。故に罪惡の吾等は直に此儘如來の救濟を蒙るものである。如來は怨親平等にして罪の子なる事を憎み給ふものではない。けれども吾等が如來の光明に覺め、その救

濟を感謝し得るは如來が自からの罪惡や本能の放縱を肯定し給ふが故ではなくて實にかゝる淺間しき凡夫をも攝取し給ふと云ふ腑甲斐無き自己に對する反省の暗流に浮ぶ絶對愛の月影でなくしてはならぬ、見方にも依るけれども宗教家としての親鸞の偉大は決して結婚せし事にあるのではなくて熾烈なる本能の執拗さや自己の醜惡魯鈍さに斷腸の思ひをなしつゝ、極惡の凡夫と實觀し愚禿と嘲笑して全く自己を否定し去れる時如來の讃仰となり、本願に對する確信は絶對他力への歸入となつた宗教的渴仰に存する。則ち本能のまゝなる醜き自己を見出したるとき絶望の溜息はやがて信仰の活路の覺めとなつたのである、此内心の悶にこそ宗教心は培かはれ偉大なる力は發現する。

彼の豪放なる偉傑日蓮も、その吾等をして崇敬せしめるものは、四箇の格言やその熱狂的獅子吼ではなくて實に『日蓮は日本國東夷東條安房の國海邊の旃陀羅が子なり』『日蓮今生には貧窮下賤の者と生れ、旃陀羅が家より出でたり、

心こそ少し法華經を言じたるやうなれども、身は大身に似て畜身なり』等の自己反省の中に吾等は彼の偉大なる面影を忍ぶのである。智慧第一の法然房と當時の學匠等に依つて讚へられし彼が『烏帽子もさざる法然房』『愚痴の法然房』『十惡の法然房』との峻烈なる反省の發露が如何に彼の人格を偉大にし、眞の宗教家として吾等の渴仰を高める事が、かく法然。親鸞、日蓮等が其によく鎌倉新興宗教の開祖として重きをなす所以も法然が吾等の生命の泉となれる所以もこの共通せる宗教的内心の叫びを有せしに依るものである、それは眞情流露の心からの懺悔と渴仰であつた。吾等は法然や親鸞の愚痴の凡

夫としての人間的な點に多くの親しみを覺ねるけれども上述の如く單に人間的なるが故に尊いのではない、覺如が觀音の誓告を讚歎しやうとも現代人が、それに共鳴し感激をしたればとてそれは哀れなる無自覺者の迷盲であり、現實的功利的な近代思想の歛帛を物語るものに過ぎない。近代の思想が自我の解放に貢獻し得たりとしてもその解放せし自我は人間的であると云ふ事がやがて人間性の讚美より本能の肯定放縱に感激を覺ねるであらうならば、やがては幻滅の悲哀にのみ終るであらう。それは法然や親鸞が歩みしとは、似てもつかぬ無理想な曠野である

(一九二六・十一・十)

或時^ニ有^リ鎮西^ノ僧^ニ行脚^ス之^ノ次^ニ訪^フ吉水^ノ廬^ニ師^ト適^テ念佛^ス在^リ道場^ニ侍^ル者
迎^テ而^テ相對^ス行者^ノ問^フ曰^ク稱^ム名^ノ之^ノ時^ニ繫^ル心^ヲ於^テ佛^ノ相^ヲ好^ム可^ク乎^ト侍^ル者
答^フ曰^ク此^レ實^ニ可^ト也^ト師^ト排^テ道場^ノ戶^ヲ言^フ曰^ク源空^ハ不^レ然^ラ唯^テ思^フ若^ク我^レ成佛
十方^ノ衆生^ヲ稱^ム我^レ名^ヲ號^ス下^ニ至^リ十聲^ノ若^ク不^レ生^ク者^ハ不^レ取^リ正^覺彼^レ佛^ノ今
現在^ニ世^ニ成佛^當地^ニ本^ノ誓^ヲ重^ク願^フ不^レ虛^ニ衆^生稱^ム念^ヲ必^ズ得^ル往^リ生^ノ之^ノ文^ヲ
而已

(拾遺語燈錄卷上)